

果樹

水上瀧太郎

青空文庫

相原新吉夫婦が玉窓寺の離家を借りて入ったのは九月の末
 だった。残暑の酷しい年で、寺の境内は汗をかいたように、昼日
 中、いまだに油蟬あぶらせみの声を聞いた。

ふたりは、それまでは飯倉の烟草屋の二階に、一緒になつて
 間もなくの、あんまり親しくするのも羞はずかしいような他人行儀の失
 せ切れない心持でくらししていた。ひとの家の室借へやがりをしていると、
 何かにつけて心づかいが多く、そのために夫婦の間に夫は妻に対
 し、妻は夫に対して、あたりまえ以上の遠慮があつた。

田舎いなかの商業学校を卒業して、暫く役場に勤めていたけれど、将
 来の望のぞみもなく、もともとあととりの身の上ではなかつたから、東

京に出て運をためして見ようという気になって、新吉が故郷を出てから十二年になる。小学校では級長をつとめた事もあるし、商業学校でもいつも平均点は甲だったから、もしも学資が豊かならば、大学まで行きたいのだったが、それは許されない望だった。郷里の先輩で、相当の地位の役人をしているのに口をきいて貰^{もら}つて、現在勤めている銀行の最下級の行員となつて、夜は神田の私立大学に通つた。東京に行きさえすれば、うで次第でどしどし偉くなれるように考えたり、級長だったというだけの事で人に勝^{すぐ}れているように思い込んでいたのなどは、夢よりもはかなく消えてしまった。いい学校と悪い学校の区別もなく、大学という名前の魅力に誘われて、大したもののように想像していたところも、い

たつて無責任なものであつた。三年間の夜学を卒おえて免状を貰つた時も、これで明日から苦しいおもいをしず、銀行がひげさえすれば楽々と手足が延ばせるという安心があつたばかりだ。別に学力が増したとも考えられなかつた。それでも銀行の方は人一倍真ま面目じめにつとめ、おとなしい正直な事務員として上役にも目をかけられ、毎年三円五円と昇給して、僅わずかながらも貯金も出来た。いったいに辛しん抱ぼうのいい方でその間六年間烟草屋の二階にいた。

朝は早く、夕方はきちんと帰り、夜よ遊あそびなどは一度もした事になかつた。月々の雑誌を二三冊とつて、始めから終まで丹念に読むのが楽たのみのひとつで、日曜祭日にも郊外を散歩する位くらがせきのやまだった。烟草屋のお婆さんは、いかに新吉が真面目で勉強家

で身持が正しいかを隣近所に吹聴して廻った。お婆さんには息子が一人あるのだが、或保険会社の台湾支部に勤めていた。孫の顔も見られない寂しさから、新吉を我子の様に可愛がった。新吉に妻を世話したのもお婆さんだった。

おときはお婆さんの念仏友達の、近所の菓子屋の隠居の遠縁の者の娘だった。うちは日本橋の裏通のちいさな下駄屋で、女学校には三年まで通ったが、生意気になっては困るといふ両親の意見で、学校をやめて大名華族の邸に行儀見習にやられた。十六の年から二十までつとめたが、病気をして宿に下つてからずるずるになつて、母親の手助をしていた。菓子屋の隠居が何かのついでにおとぎの話をした時、烟草屋のお婆さんは直に新吉と結びつけて

考えた。最初のうちこそまだ早いとか、二人になつては暮しが楽でないとかうじうじしていたが、お婆さんが借りて来て見せた写真はまんざらでなく、みすみす断るのは惜おしい気がした。どうせ一度は貰うものならと云う氣になつて、案外手取てとりばや早く話はきまつてしまった。それを機会に一軒うちを持ちたいとも考えたが、先方でも当分は二階借で結構だといふので、そのまま烟草屋の二階の六畳に、不自由ながらも楽しい日を送る事になつた。それが今年の春の事だつた。

最初のうちはお婆さんも、自分のうちに嫁が来たようなもの珍しい喜びを感じたが、それは長くは続かなかつた。二階の二人が自分を邪魔にしているという疑念わざらに煩わづらわされるようになった。

「うちの相原さんも先の頃せんとは変りましたよ。」
などと近所の者にも告つげ口ぐちするようになった。

ほんとに新吉の生活も、以前とは少しは変わった。たまには二人で活動写真を見に行ったり、新吉の銀行の帰りをおとぎが途中で待うけて、どこかで御飯を食べて来る事もあった。それがいちいちお婆さんの気に入らなかつた。

二階の二人も、室借の窮きゆうくつ屈くつに悩んでいた。殊ことに新吉は、六年間お婆さんの親切には心から感謝していたのに、俄にわかにいやな事ばかり目に立って、しみじみ他人の家の狭さを思い知った。

それでも長い間世話になり、もともとおときと一緒になつたのもお婆さんのおかげなのだから、結婚して間もなく出て行くのは

心ががめていい出せなかった。その点にかけてはおとぎの方は、さほど世話になったと云う考かんがえも深くはないので、どんな裏長屋でもいいから一軒構えたいと年中せがんでいた。せがまれると、おとぎを喜ばせたい心が強くなって、新吉もいつそ思い切つてそうしようかとも思うのだが、生来のおとなしさと、人一倍義理や恩義には堅い方なので、愚ぐ凶ぐ愚ぐ凶ぐに一日一日延びていた。

ところが幸いな事に、台湾に行つていたお婆さんの息子が突然本店詰になつて引ひきあげ上あげて来る事になつた。いずれは別に一軒構える事になるかも知れないが、当分の間お婆さんと一緒に住むという事で、新吉夫婦はお婆さんのいやな顔を見ずに引越す事が出来るようになった。

いざ探すとみると、貸家も思うようには見つからなかった。新聞の広告欄を見たり、周旋屋の前に貼出はりだしてある掲示に足をとどめたり、日曜には二人であてもなく山の手を歩いたりしたが、結局銀行の同僚が、白金しろがねの寺の離家があいていると教えてくれたので、夫婦で行って見てきめてしまった。

御寺は高台の崖に臨んだところにあつた。古川をさしはさむ町々を見下し、雑木ぞうきの多い麻布台あざぶだいと向あつていた。たいして大きな寺ではなかったが、庭は広く、貸家の目的で建てた離家は、六畳と四畳半と三畳というささやかなもので、普請ふしんも粗末だったが、日ひ当あたりも風かぜ通とおしもよく、樹木や草花の夥おびただしく植うえてあるのを我わがものにして、夫婦二人きりの住居にはこの上もなく思われた。今ま

でいた飯倉の烟草屋の二階では、障子しょうじをあけると目の下の神かみや
 谷町ちようから西久保へかけて亜鉛トタン葺ぎの屋根の照返しが強く、息の
 詰つまるおもいをしたのに比べると、籠かごから逃げた小鳥の気持だった。
 他人まぜずの朝夕を迎えて、二人はほんとの夫婦の情愛を初めて
 知った。

少しずつ所帯道具たのしを買う楽しみも深かった。三田の縁日の晩に、
 予々かねがねほし欲しいと思つていた長火鉢を買つた時は、新吉もおときもす
 っかり興奮して、帰途はお互に話す声も高くなり、人通の少いこ
 ころでは固く手を握合つた。双方から感謝したい感激で胸がいつ
 ぱいだつた。次の日、新吉が銀行から帰ると、留守の間に届いて
 いた長火鉢に鉄瓶をかけて、おときは赤坊に御湯をつかわせる母

親のように、殆んど抱きかかえる形で、大事に大事に布巾ふきんをかけたいた。

二人にとつての苦手は、お寺の梵妻だいいこくのしつっこい程口数ほどの多い事だった。六十近い和尚おしょうと、先夫の子だという十六七の娘と、たった一人の弟子坊主を意のままに動かしているしつかり者で、自分の目から見れば世間馴ない夫婦を、指導してやろうとする心持が露骨だった。まだよそゆきらしい夫婦仲を、先輩が後輩にのぞむ態度で面白がっていた。

無口で羞はずかしがりのおときは、まるつきり威圧されて、梵妻と顔を合せることを避けよう避けようと努めていた。昼間新吉の留守に、裏の井戸端で洗濯している時などは、向も退屈むごうしきっている

ので、下駄をつっかけて来ては側そばでおしやべりをしていた。和尚は門番の寺男と年中碁ごを打っているし、娘は女学校に通い、弟子坊主も四角い帽子をかぶって宗教大学に通っているので、梵妻は話相手に飢えていた。諸式が高くなってお寺の経済の苦しい事、和尚がぼけてしまつて頼りにならない事、この前離家を借かりっていた小学教員夫婦の悪口などを繰返してきかされるのはまだしもだつたが、新吉夫婦にかかわる内輪の事を、根掘葉掘ねほりはほり訊きかれるのには、おときもよわり切つていた。いつ、どういふ風にしていつしよになつたかとか、新吉の月々の収入はどの位だとか、立入ほかつた質問を受けると、おときは顔をあかくしてうなだれる外ほかに活路を見出せなかつた。

「あたしお寺の奥さんにはほんとに困ってしまふのよ。あなたの月給はいくらだなんて訊くんですもの。」

新吉が帰つて来ると、救われたように気強くなつて、おときは昼間梵妻にしつつこく悩まされる事を訴えるのであつた。つい言葉に力が入り過ぎると、御寺の離家に住むのを厭ういとような口ぶりさえ漏もらした。

「そりやあひどいな。だけどその位の事はしかた為方がないよ。こんな借家は一寸ちよつとないぜ。僕は飯倉にいた時に比べると、頭脳あたまはやすまるし食欲は旺盛おうせいになるし、めきめき健康がよくなつたように思う。」

「そりやそうですけどね、だってあんまりなんですもの。」

そうは云うものの、新吉と差さしむかい向むかひで晩飯を喰たべ、日がかげると俄にわかに涼しくなる頃の縁側で、虫の声の外には何の物音もしない広い庭から、崖の下の町に灯のともる景色を見てみると、湯治とうぢ場じばにでも行つたようなゆたかな心持になる。

「銀行の連中で、こんな広い庭を持つてる人なんかありやあしない。先まず頭取と支配人だけだろう。僕は田舎に育つて、子供の時分植物や昆虫の興味を先生に吹込まふきこまれたが、久しぶりでこうしたところに住むと、樹や草を見るだけでも気が清せいせい々せいする。それにしても飯倉はひどかったからなあ。」

烟草屋の二階の窓に据えて置いた朝顔の鉢は、引越の時に持つて来て縁先に置いたが、今では花もすがれてしまった。はかない

その一鉢さえ、^{トタン}亜鉛屋根の景色を背景にしては、毎朝開く花の色に相当深い愛着を持ったのであつた。

「あたしは騒々しい町の中で生れたので、木の名なんか何も知らないですよ。」

「だって邸にいた時は、広い庭があつたらう。」

「そりやあ何千坪っていうんですから、広いには広いんですけど、ただ立派な御庭だと思つただけでしたわ。よく御庭掃除のじいやさんが、あの松一本でも千円の値うちがあるなんて云つてましたけれど。」

「この御寺には珍しくいろんな樹がある。僕がひとつひとつ教えてやろうかな。」

「ええ教えて頂ちようだい。」

二人は縁側に並んで腰かけて、たそがれた庭に向つていた。

「あの門を入ると直すぐ右手の樹は知つてるだろう。」

「あれなら知つてるわ。ぎんなんの樹でしょう。」

「そんなら本堂の前のは。」

「さるすべり。」

「なかなか知つてるじゃないか。それではあすこに見える一番背の高いのは。」

「ああ。あの沢たくさん山鳥の来る樹ですね。わからないわ。」

「榎えのきさ。」

すっかり夜になって、こおろぎの声のしげくなるまで、あきぎ

に植物や虫や鳥の話をした。

新吉は、殆んど何も知らないと云つてもいいおとさきに対して、自分の知識の豊富なのが嬉しかった。おとさきにしても、何を訊いても知つている新吉が、たよりがあつて嬉しかった。

それがきつかけになつて、新吉はいろいろの樹や草や鳥や虫の名を、おとさきに教えるのが楽みのひとつになつた。寺の地面うちだけでも、松、杉、かえて楓、いちよう銀杏などの外に、しい椎、かし檜、むく榎、とち棕、とち橡、ほおえんじゆ朴、えんじゆ槐などの大木にまじつて、桜、梅、桃、すもも李、ゆすらうめ、栗、びわ枇杷、柿などの、季節季節の花樹や果樹があつた。草花にははぎ萩、ききよう桔梗、すすき菊、けいとう芒、けいとう鶏頭などの秋のもの外に西洋種も多く、今はサルビヤが真紅に咲きほこつていた。

榎の高い梢こずえには鶇ひよどりが群むらつて来た。銀杏からすりのてっぺんで百舌もずの高啼たかなく日もあつた。竹むらにからまる鳥からすり瓜からすをつつきに来る鴉からす、縁からす側の上まで寄つて来る雀、庭木の細かい枝をくぐる鶇ひわや四十雀しじゅうからの姿も目に止つた。

おときは新吉の指さす樹の枝に、可愛らしい小鳥の姿を見つけ
た時などは、声をあげて喜んだ。そういう事に喜ぶ自分というも
のを初めて知つた。自分が喜ばば、夫が満足する事も一層嬉しか
つた。全く今まで知らなかつた興味が、野原にも藪やぶの中にもある
事がわかつた。

けれどもおとときが弱つたのは虫の多い事だつた。蚊帳かやの用意が
なかつたので、十月のなかばまで難なんじゆう渋じゆうした。蚊ばかりではな

い。名も知らない虫が、あかりを慕つて来る。蝶々蛾がの類に属するもの、うんか、かまきり、金かなぶんぶんなどはおとぎの顔にぶつかつたり、髪にとまる事もあつた。仰ぎょうさん山さんな声を立て顔色かえを変かえて逃廻つたが、新吉は平気で指でつまんで縁側から捨てた。彼は決して殺さなかつた。

「虫なんてそんなに怖いものじゃあない。よく見てごらん。みんな素晴しく巧妙に出来ている。僕なんか、可愛らしくて堪たまらないな。小鳥だの金魚だの、ああいうものを可愛がるのと同じように、こんなちいさな虫も可愛らしいと思う。」

そう云つて、吹けば飛ぶような虫を手の平に乗せて、長い間見ている事もあつた。羽を微妙ふるに震ふるわせたり、脚すりあわを擦すりあわ合せたり、

目玉をくるくる動かしているのを、新吉はおときにも見せて面白かった。

「いくらあなただつて、かまきりは憎らしいでしょ。」

「あいつはいい奴だよ。大きな時代遅れの武器を持って威張いばっているくせに、どこかにひょうきんなどころがある。虫でいやなものまは先まずないなあ。」

「あらいやだ。あたし蛇を見るとぞつとするわ。」

「蛇は綺麗きれいだ。地面を火の波のようにうねって行くところなんか、人間のダンスなんかより余程いいや。」

「あなたつて変な方ねえ。」

おときは全く理解出来ないように云ったが、心の中では夫の何

事にも細かい観察を忘れないで、面白味おもしろみを見出すのは広い心の故ゆえだと思つて感心した。

「相原は不思議なんで御座いますよ。植木だの草花が好きなのはわかつていますけれど、ちいさな虫まで可愛がつて決して殺すよ
うな事は致しませんの。」

いつも向うから話かけられて、うけこたえばかりしているおと
きもひそかに自分の夫をほこる心持をまじえて梵妻むかでに話した。

「蝶々とんぼや蜻蛉とんぼならよござんすけれど、蛇だの百足むかでだの金ぶんぶん
までお友達かなんかのように思っているんですもの。」

「まあ蛇ですつて。いやだいやだ、あたしなんか聞いただけでも
ぞつとしますよ。」

梵妻はうすい眉毛まゆげを寄せて、おびえた表情をして見せた。それがおとときに、ひどく勝ほこった気持を与えた。

「いただくものにしなくても、お魚や肉よりも野菜の方が好きですし、お菓子なんぞには手も出しませんが、果物は大好物ですねえ、自分は山家やまがそだち育だから、なんでも土に近いものが好きだなんで申しておりますの。」

新吉にきいて初めて知った樹や草の名前を口にしたたり、指ゆびさして示す時は、すくなからず得意だった。

十月もなかばを過ると、落葉の早い碧梧桐あおぎり、朴、桜などは殆ほとんど散ちり尽し、外ほかの樹木も枝がうすくなって、透いて見える秋の空がくつきりと高かった。

夫婦が借っている離家の前の、黄ばみ始めた雑木にまじって、見事な柿の木が一本あった。鈍重な感じのする大きな厚い葉に、夏中は日光が鋭く照返したが、今はその葉も艶つやと光を失って、黄色く乾いたのは力なく土に落ち始めた。そのかわり葉かげにかくれていた柿の実の色づいて、枝は重さを支え兼かねるように撓たわんで来た。「あの柿の実が毎日赤くなって行くのを楽たのみにしてしましておねえ、朝雨戸をあけると、きつと縁側に立って見ておりますの。」

故郷の家の背戸せどによく生なる柿の木があったので、目の前に柿の実の赤らんで行くのを見ていると、子供の頃の事まで思い出すと云って、新吉は朝日に光る梢をなつかしそうに仰あげ見ていた。おときはその柿の木を指さして、この寺内じないに果樹の多い事が、いか

に自分達夫婦の心を楽しくさせるかを梵妻に話した。

「へええ、相原さんはそんなにも植木が御好きなんですか。それでもあの柿は見かけばかりで渋柿なんですよ。」

梵妻も、西日にてらてら光っている柿の実の鈴生りに生すずなっている梢を見上た。

「まあ、あんなに大きな見事な柿が渋いんですか。」

あれ程赤く熟したのが渋いとは全く思いもかけなかつたので、おときは何のわだかまりもなく目をみはった。

「ええほんとに見かけ倒しなんですよ。渋いの渋くないのって。」

「おやおや、それじゃあ喰たべられないのですか。」

「喰べられるもんですかね。」

梵妻は現在口の中が渋くて堪らなそうに、大きな先の太い鼻を中心にして顔中をしかめた。その様子が真に迫っていると云つて、おときは背中を車くるま海老えびのようにして笑つた。

その日新吉が帰つて来て、差向で楽しい食事をした後で、いつもの通り縁側に蒲団ふとんを並べて茶を飲みながら、おときは庭前の柿が渋柿だという事を伝えた。

「そうかしら、僕はそうは思わなかつたがなあ。」

新吉は腑ふに落ちない様子で、暮残る空に柿の実のつぶつぶ数えられるのを見上て、首を傾けた。

「だって今日の御昼、お寺の奥さんがそう云っていましたもの。あの人だったら、こんな顔をして、ほんとおかしかったわ。」

おときは梵妻がして見せた渋い顔を真似して、自分でおかしくなつて吹出してしまった。

柿の実は、その葉が黄色く枯れて散れば散る程赤さを増して、晩秋の空に、いかにも日本特有らしい風情を見せていた。新吉は、それが渋柿だろうとなかろうと、何のかわりもなく、晴れた日の空の色と、ちつとも曇くもりのない柿の實の光と、脱俗した枝ぶりとを愛した。

寺の門の外の往来からも、その梢の赤い実は、土塀を越て見えた。近所の空地に集る子供達の冒険と欲張とのまじつたいたざら本能は、そのために刺戟しげきされたものと見えて、真昼間まっぴるま、ひっそりした寺内の様子をうかがつて、鼬鼠いたちのように注意深い目を四方

にくばりながら、竹竿を持って忍び込んで来た。石を投るもの、竹竿で叩き落そうとするもの、みんなが狡猾こうかつな顔つきをして、緊張した手足を迅速じんそくに動かしていた。寺の者は気がつかなくかつたが、縁近い日あたりで縫物をしていたおときは、子供達の狼藉ろうぜきをいちはやく認めた。

「そんな事しちやあいけませんよ。」

相手は小学生だとは思っても、それだけというのがせいっぱいだった。いってしまってから、自分の顔のあかくなるのを感じた。不意に声をかけられたので、子供は一齐にふりかえって、一時はちよつと一寸ためらったが、おときの氣勢を見て取ると、相手によつて現金に変わる子供特有の凶太さで、平気で又また竹竿を振廻した。実際

の重量よりも重たい響を立てて、真赤な柿が土に落ちる。

「かまうもんかい。」

「やれやれ。」

流石さすがに声はひそめながら、お互そそのに唆かしあつて、ばらばら石つぶてを打つ者もあつた。おときは膝の上の物を畳に置いて、縁側まで出て行つた。

「およしなさいったら、叱られますよ。」

一生懸命でもう一度声をかけたが、何の甲斐かいもなかった。子供達の素振そぶりには、馬鹿にし切っている色が明あきらかだった。

「あんたがたそんなものどつたつて喰べられやしないのよ。渋柿ですとさ。」

「うそだ、喰べらあ。」

一人の奴はやつふところ懐に盗んでしまつてあつたのを取出して、いきなりがぶりとかじりついた。

おときは自分の意気いくじ地のないのをなさけなく思いながら、途方にくれて、子供達の暴虐に枝をふるわせている柿の木を、いたいたしく眺めていた。相手は大人には違いないが、声も顔つきも優しい女なので、いたずらこつ兎はすっかり呑んでかかつていた。咎とがめる人の目の前で平気で柿を叩き落してやるのが、自分達の勇気を示す事のように痛快に思われた。何のはばかりもなく、かけ声をして、柿の枝をばさばさ打った。

「こら、何をする。」

突然庫裏くりの方から、声を震わせて梵妻だいきくが現われた。手に鋏くわの柄えのような堅い棒を持ち、肥ふとった体を不恰好ぶかつこうに波うたせ、血相かえて来た。その勢いきおいにすっかり脅おびえて、子供達は干潟ひがたの寄居虫やどかりのようにあわてて逃出した。

梵妻はどこまでも追かけて行つたが、子供の方が素早くて、たちまち門の外にちりぢりに散つてしまった。

「鬼婆あ。」

「とつたぞ、とつたぞ、柿六つ。」

塀の外でふしをつけてはやした奴があつた。

「とつたぞとつたぞ柿八つ。」

今度は獲物の数をふやして、二三人声を合せてからかった。そ

の合唱をしつつこく繰返しながら、子供達は遠くへ逃げて行つてしまつた。

「畜生、育ちの悪いがきつたらありやしない。」

未練らしく往来の方を振かえりふりかえり、せいせい呼吸をはずませて、だいくく梵妻は漸くようや戻つて来た。

「まあこんなに荒して行つてさ。」

柿の木の下に立つて、落散つた枝や葉をいまいま忌々しそうに見ながら、ぶつぶつ云っているのが、おときにとつては自分の監督不行届を叱られているように感じられた。いったん部屋の中に入つて、しょうじ障子もしめてしまおうかと思つた程だつたのが、ことさら殊更縁側へ出て、自分の方から声をかけないでは済まされなくなつた。

「ほんとにひどいんですよ。いくらあたしがいたずらしてはいけないって云つてもきかないんですもの。」

「そんなこつてきくもんですかね。今度来たらひっぱたいてやるから。」

いつまでも、寂しくなつた木の梢を見上て、誰にでも当りちらしたい肚はらの中をあからさまに、きびしい事を云うのであつた。

「子供しかたつて為方しかたのないものですねえ。あたしがそれは渋柿だから、取つたつて喰べられやしないって云つたんですけれど、がりがりかじつて見せたりして。」

おときはいいわけがましく、気の弱い事を繰返して、心の中ではなさげなく思つた。

新吉が帰つて来ると、待構えていて、その日の出来事を話した。

「だつて、いかにもあたしが意気地いくじがないから柿を盗とられたんだつて云うような口ぶりなんですもの。あの梵妻さんも随ずいぶん分だわ

。」

味方を得た嬉しさで、しきりに自分の弁護と、梵妻のどぎつい態度を非難した。ふだんはお寺の奥さんと呼んでいたのが、梵妻さんだの梵妻だのと云つた。

「子供は為方がないなあ、すっかり葉の落尽した骨のような枝のさきに、熟し切つたあかい奴の鈴生りになっている景色が秋の風情なんだがなあ。」

あくまでも自分の目を楽しませ、心をなぐさめるものとして、

なつかしがっていたのだから、子供の暴虐のあとを、わざわざ庭に出て見届けて来た。

「なあに、それ程の事はないよ。たかが五つか六つ落されたただけだろう。」

さも安心したらしい様子で家の中へ引返して来た。

「渋柿なんか少し位とられたつていいじゃありませんかねえ。」

梵妻の態度がいつまでも心に残つていて、楽しい食事の間にも、おときは口惜くやしがつていた。

その頃、おときは初めて自分の体にただならぬ変化おきの起おきた事に気がついた。末の妹の生れる時、産さんじよく褥じよくで母のあさましくくるし苦むのを見たり、その後もひよわくて年中両親に心配ばかりかけてい

るその子の事を思うと心配だった。何という事もなく、夫に大きな負担をおわせてしまったような気がして、済まないと思うと、いい出し悪にくかった。それでも黙つてもいられないで、

「あたし、子供が出来たのかと思うの。済みませんが……」

と夫の顔色をうかがいながら切出すと新吉は上機嫌で、

「済みませんとは何の事だい。僕は子供は大好だ。」

と云つてさも面白そうにおときの言葉を笑つた。そうきくと、

おときは自分の体内に夫の愛情が形になって宿つたような気持ちにわして、俄かに我身がいとしくなつた。

「あなたに似て利巧りこうだといいわねえ。」

などと云つて、心たのしから楽しみに思うようになった。夜が寒くなつ

て、たださえ人肌の恋しい頃、妻がただならぬ体になったという事が、夫婦の仲を一層こまやかにした。

子供達が最初に柿を盗みに来てから四五日しかたたないのに、二度目の冒険を企てて、又また忍び込んだ。その時は幸いに、いつもは裏の墓地で草をむしっている門番のじいやがたまたま追払った。急をきいて駈けつけた梵妻は、又してもおときの耳の痛くなるような声を張はりあげ上あて、いたずらつこを罵のつた。自分の心持からも多少神経質になつておるときは、それをひどく気にした。

「あなたみたように眺めて楽しむ気もないくせに、どうしてあんなに惜おいのでしょうか。渋くて渋くて喰べられないっていうのに。」

たかだか柿を盗みに来る子供のいたずらに、和尚も弟子坊主も

娘も寺男も呼集めて、いきり立つ梵妻を、おかしがるだけの余裕はなく、自分自身が罵られたように忌々いまいましかった。誰も知らないうちに、子供達がみんなとつてしまえばいいなどと、腹の中では考えていた。

その日、寺の者は柿の木の下に集つて、しばらく評議していたが、やがて弟子坊主と寺男は梯子はしごをかついで来て、若い方が学生服のズボンにシャツという姿になつて高い枝に登つた。下では梵妻と娘が莫塵ごごの四隅を持ち、上からちぎつて落す柿を受けていた。老僧も監督するような形で、懐ふところ手をしながら日向ひなたに立つて眺めていた。

おときはかかりあいになるのを惧おそれて、障子の中で針仕事をし

ながら、時々隙間からのぞいて見た。余程たつて、何かやがや話しながらみんなの足音が入まじって庫裏の方へ引上て行つた後で、障子をあけて縁側に出て見たら、無数に赤く日に光つていたのが、ひとつ残らず、もぎとられていた。

銀行から帰つて来た新吉は、寺の門を入ると直に、柿の梢の荒らされたのに気が付いた。時が来て、熟し切つて土に落たのとは違つて、人間の手が無理にもぎとつたためか、一層いたましく見えるのであつた。

「どうしたんだらう、みんな柿をとつちやつたのかしら。」

出迎えたおときの顔を見るや否や、面白くない様子で訊いた。

「ええ、又子供達が荒らしに来たものですから、お寺の人が総出

でとつてしまつたんです。若い坊さんがてつぺんまで登つて、枝なんか惜気おしげもなく折つて下に落していました。」

いいつけ口をする時の早口で、おときは昼間の光景をつぶさに描写して見せた。

「渋をぬいて喰べる気かなあ。これからすつかり葉の落尽した眺めが何よりいいのだが、惜い事をしてしまつたなあ。」

暮かかかる縁側で、枝の折口の生々しく見える柿の木をいたいたしそうに、未練な事を云つていた。彼の心には、村中に柿の木が沢山あつて、秋の今頃の美しい故郷の景色が、絵よりも鮮あざやかに映つて来た。

その郷里の家からは、烟草屋の二階に室借をしていた独身時代

にも、時々林檎りんごや柿よこを寄越よこしてくれたが、今年はは初茸はつたけと湿地しめじ茸けを送くつて来た。きのこを炊たきこ込んだ御飯ごはんは、新吉しんきちが子供の頃ころの好物好物だったと嫂あによめが代筆だいひつした母の言葉ことばを書添かきそえてあつた。

「まあ、あたし初茸御飯はつたけごはんなんて初めてですわ。どんなでしょう。松茸まつたけならおいしいと思いますけれど。今晚こんばん直すぐに炊たきいて見みましようか。」

粗あらい竹籠たけかごの中なかからあふれるように出て来たのを手にのせて、おときは珍めづしそうに見みていた。十一月じゅういちがつの初めはつめの、時雨しぐれの降ふつた後の寒さむい日ひであつた。たきまぜの御飯ごはんの香かは殊ことになつかしく思おもわれた。「そりゃあ松茸まつたけのようようにうまうまくはないさ。くにの方かたにはそんな上等じょうとうなものものはありやしない。初茸飯はつたけごはんか、久ひさしぶりで田舎いんかに帰かえつたよ

うな気がする。御豆腐おとうふの御つゆがほしいな。」

新吉には、いかにも晩の食卓が楽みらしく、勤に出て行くにも張はり合あいのある姿だった。おときはそれが嬉しかった。格子の外に出て、鋪しきいし石の上に靴の音が聞えたが、新吉は又戻つて来た。

「あの初茸だの湿地茸ねえ、随分沢山あるから御寺の人にも分けてやろうじゃあないか。くにから来たものですつて。」

わざわざ云いに来て、おときのうなずくを見て行つた。

夕方新吉は、

「ああ今日程忙しい事はなかった。すっかり疲れて御腹おなかも減つてしまった。初茸御飯が待遠しいな。」

靴を脱ぐ間もそんな事を云っていたが、そう直すぐとはいかない

ときくと、手拭てぬぐいをさげて湯に出かけた。

めつきり日脚ひあしも短くなり、かなり遠い湯屋から帰って来る道では、湯上ゆあがりでも肌寒く感じるようになった。昼間仕事のたてこんだために、すっかりくたびれたのが、湯に入つて一層空腹を感じた。宵闇よいやみの中を歩きながら、埒ねぐらに騒ぐ鳥の声を聞いて、この季節に著しく感じる澄んだ寂しさが腹の底まで沁しみるのを知った。うちのあかりの障子に映るのを見た時は、新吉の心は喜びに震えるようだった。

あつたかい初茸飯の湯気の立つのをふうふう吹きながら、故郷の秋のあわただしく暮れて、早い初雪が来て冬ふゆごもり籠もりの季節となる頃を、涙ぐましい程なつかしく思い出した。

「あたし初めてですけれど、おいしいわねえ。」

おときも、初茸あわの淡い香、滑なめらかなようでした。やきしやきする歯ざわり、噛かみしめるとどこかに土のつめたさを含む味をほめた。

「今朝出がけにそう云った通り、お寺の人にも分けてやったかい。」

「ええ、御寺の奥さん大変喜んでいました。それでね、おうつりのしるしだって、柿を持って来てくれましたよ。」

「柿。」

「それがおかしいんですよ。庭の柿なんですって。あんなに渋い渋いと云っていたのにどうしたんでしょう。あたし達が盗とるといけないでも思つて、そんな事を云つたんじゃないでしょうか。」

「そうかもしれぬ。」

「なんて憎らしいんでしよう。そんな事云わなくたって盗りやしませんわね。」

ここに引越して来て以来、何べん梵妻の口ずから聞かされたかわからないのを思い出して、おときはしきりに忌々いまいましがった。

「ああ食った食った。久しぶりで実にうまかった。初茸飯なんて田舎めかしいものを食うと、おやじやおふくろの顔が目に見えるような気がするなあ。」

番茶の焙ほうじた香ばしいのをすすりながら、新吉は満腹して重たい体をもてあつかうように、食卓にもたせかけ、おときの顔を見て笑った。すべての事にみち足りた時、おのずから浮んで来る微

笑だった。

「あたしもほんとに頂けちゃったわ。まぜごはんは食が進むと思つて、今日は余計に炊いたんですけれど、この通りですわ。」

おはちの蓋ふたをとつて傾けて見せると、中はからからになっていた。

台所でおときが食事のあとしまつをしている間に、新吉は縁側の雨戸をしめ、銀行の帰りに買って来た夕刊を丹念に読んでいた。
水底みなぞこのように冷つめたく青い月の夜で、庭の樹々は心あるものが強いて沈黙を守っているような静けさで、轟すくすく々と空に裸の枝を延ばしていた。その静けさは雨戸をしめ切った室の内までも沁みて来た。

台所で水を流す音や、瀬戸物の触れあう音が耳に入ると、新吉は読んでいる新聞の記事が頭に入らなかつた。そこで働いているおときのお腹の中に子供が生育しつつあるという事が、妙に頭にごびりついていていた。一人の女が自分によつて子供を生むという事が、不思議の念をまじえた期待で心の底をくすぐっていた。

「あなた、うたた寝なんかして風邪かぜを引きますよ。」

いつの間にかこくりこくりやっていたのをおときに起されて、新吉は嚏くしゃみをしながら身を起した。

「ほら御ごらんない、もう風邪を引いてしまつたんですよ。」
とたしなめて、長火鉢に炭をつぎながら、おときは眉をひそめた。

「今日はしんが疲れたんだなあ。こんな時は早寝にしよう。ほん
とに風邪なんか引いては馬鹿馬鹿しいや。」

「それがいいわ。夜はすっかり寒くなりましたからねえ。」

二人は長火鉢を両方からさしはさんで手をあつためた。何気ななにげ

いふりをして、新吉は妻の柔い手に自分の手の甲をちよいちよ
触れて見た。ほんの僅かな浮いた心が、ひっそりした秋の宵の澄
んだ心境の表面にさざ波をたてた。

「あなた、柿めし上って見ない。」

「お寺でくれたのかい。喰べて見ようか。」

「ほんとに渋くなかったら、随分おかしいわねえ。」

おときはいそいそと台所に立って行って、塗ぬり盆ぼんの上に四つの

せてある柿に庖丁を添えて持つて来た。艶々つやつやした果実の肌は、

あかりの下にくもりのない色を光らせた。するするとおときの指輪の光る指の間から、細く長い皮が垂たれさが下つて、水気のある肉はあからさまになった。それを四つに切つて新吉にもすすめ、自分も口に入れた。渋い渋いときかされていたので、初めは用心深く歯をあてたが、直すぐに甘い汁が舌を浸した。

「どう？　ちつとも渋くはないわねえ。」

「うまいや。いい甘味だ。」

歯に沁みる冷い甘さを噛みしめながら、二人は笑をとりかわした。

「やっぱりあたし達が盗つて喰べると思つて、わざと渋柿だなん

て云つてたんですわねえ。」

馬鹿馬鹿しい梵妻の浅智恵を忌々しく思うのを通り越して、わだかまりのないおかしさを感じた。

「うまいなあ。」

それには返事をしずに、新吉は自分で庖丁をとつて別の一つをむき始めた。

四つの柿は、すっかり皮と種子になつてしまつた。二人の舌には果物のみが持つ清々^{すがすが}しい味が残つていた。何の不満足もない瞬間だった。妊娠^{なまめ}しているという事実が心を唆^{そそ}るためか、この頃妻の姿体が俄かに艶^{なまめ}かしさを増して来たように思つていたが、今もその感じが鋭く襲つて来た。新吉は火鉢の上で、妻の両手を軽く

握った。火気のために掌は直ぐに汗ばんだが、霜の多そうな夜で背中や膝はつめたかった。

崖の下の町の方で、しきりに犬が吠えていたが、それが聞えなくなるのと、しんとした雨戸に月の迫るのを感じるばかりだった。どこで啼^なくのか、風邪を引いているような蟋^{こおろぎ}蟀^{せむし}の音が聞えた。いつもこの室に並べて敷く二つの蒲団を、ひとつにしたような夜であった。新吉があくびをすると、おときも、つい誘われて、なるべく口を大きくはあくまいとつとめながら、とうとう堪^{こら}えきれなかった。目のふちをあかくしながら、夫の顔を見て首をかしげて微笑した。

青空文庫情報

底本：「銀座復興 他三篇」岩波文庫、岩波書店

2012（平成24）年3月16日第1刷発行

底本の親本：「水上瀧太郎全集 第五卷」岩波書店

1941（昭和16）年1月20日

初出：「中央公論 十二月号」

1925（大正14）年11月8日

入力：酒井裕二

校正：noriko saito

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

果樹

水上滝太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>